

國學院大學學術情報リポジトリ

書評

三樹陽介著『首都圏方言アクセントの基礎的研究』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子, Kibe, Nobuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000105

〔書評〕

三樹陽介著 『首都圏方言アクセントの基礎的研究』

木部暢子

本書は、首都圏方言のアクセントに関する初めてのまとまった研究書である。本書はまず、「首都圏方言」とは何か、という問題から書き起こされる。「首都圏方言」という語が新しい術語であり、まだ周知されていないためであるが、本書によると、「首都圏」とは、行政的には「東京都の区域及び政令で定めるその周辺の地域を一体とした地域」（首都圏整備法 昭和三十一年）、「埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県、栃木県、群馬県及び山梨県の区域」（首都圏整備法施行令 昭和三十二年）を指すところ（p.41）。ただし、このような行政上の範囲と言語

上の「首都圏方言」の範囲は、必ずしも一致する必要はなく、言語的には、『首都圏方言』とは東京を中心として広く行なわれている東京都市圏のことを意味するもの」であり、「厳密に『首都圏』の範囲を定めることはできない」（p.18）というのが本書の立場である。

首都圏方言を厳密に定義するのが難しいのは、首都機能の拡大に伴い、首都の範囲が日々、拡大しつつあると同時に、これらの地域では「人口の流動が激しく、伝統的な地域方言を維持する社会的基盤が脆弱になってきており」、「多くの話者は漠然

と共通語が話されていると思っっている」にもかかわらず、そのことは共通語とは異なり、日常的な言語接触によるさまざまな言語変種となっているからである (p.19)。

そうは言っても、研究上は最初に研究対象を明確にしておく必要がある。それについて、本書は研究の対象を東京都(島嶼部を除く)、埼玉県、神奈川県、千葉県、山梨県郡内地方とまづ設定し (p.18)、その上で、第1章では東京方言を、第2章では山梨県上野原市方言を、第3章では東京周辺諸地域の方言(東京都檜原村方言、神奈川県小田原市方言、埼玉県東部地域)を取り上げ、アクセントの実態報告と分析を行なっている。以下、各章を概観してみよう。

第1章は、若年層のアクセントを中心に、近年、進みつつある東京方言アクセントの変化を捉えたものである。最も多くの紙幅が費やされているのは、形容詞のⅠ類(「赤い」の類)とⅡ類(「白い」の類)の統合に関する研究で、ここでは、終止形と連体形のアクセント変化の傾向の違いが述べられている。すなわち、終止形ではⅠ類語が中高型化し、その結果、Ⅰ・Ⅱ類が中高型で統合するという変化が進んでいるのに対し、連体形ではⅠ類語が平板型を保つ傾向が強く、中高型のⅡ類との統

合があまり進んでいない。

一方、「Ⅰテ」形に関しては、Ⅱ類にシ」ロク・テ」シロ」ク・テのような中高型化(核の右方シフト)が起き、その結果、Ⅱ類がⅠ類へ統合している。一見、終止形ではⅠ類がⅡ類へ合流する形で統合が進行し、「Ⅰテ」形ではⅡ類がⅠ類へ合流する形で統合が進行しているというように、逆方向の合流が起きているように見えるが、じつはこれは両方とも「無標の中高型」への変化という同じ変化だと説明される。次の節では、「Ⅰナイ」形、「Ⅰナル」形にも「無標の中高型」への変化が起きていることが述べられ、結局、首都圏の形容詞の活用形のアクセントは、「無標の中高型」へと収束していく傾向にあるという。

第2章は、山梨県上野原市方言のアクセントについて体系的な調査を行い、アクセント体系を明らかにした上で、上野原市方言がさまざまな点で東京アクセントの古相を示していることを述べたものである。中でも、次の指摘は興味深い。(1)3拍以上の名詞の尾高型は、現代東京方言ではほとんどが平板型や中高型に変化した。上野原市方言ではまだかなり尾高型を保持している。(2)尾高型を保持しやすい語は、複合名詞のうち後部要素に動詞連用形の転成名詞を持つもの(「口当たり」等)、同

じく後部要素に「書」「所」などの特定の語を持つもの（「意見書」等）、動詞連用形からの転成名詞（「諦め」等）である。（3）複合動詞のアクセントは、前部要素の拍数とアクセントにより決まる。（3）については、上野原市方言は山田美妙の法則を保持しているわけだが、中にはそれよりもさらに古いと見られる例や現代東京方言のようにマイナス2型に一型化する例も見られ、ダイナミックな様相を呈している。ここから、複合動詞アクセントは次のような変化プロセスをたどったのではないかと推定する。

- ① 前部要素が平板型のものは、早くから後部要素のアクセント核の位置がそのまま複合動詞のアクセントに反映されていた。
- ② 前部要素が起伏型の動詞では、その拍数に関わらず前部要素のアクセント核の位置がそのまま複合動詞のアクセントに反映された。
- ③ 前部要素が起伏型の動詞のうち、前部要素が1・2拍のものは、3拍以上のものに先駆けて後部要素と強く結び付き、複合語アクセントの平板化を起こした。
- ④ 前部要素が起伏型の動詞のうち、前部要素が3拍以上のもの

のも、平板化していく。

- ⑤ 前部要素が起伏型のもはすべて平板化し、前部要素が平板型のもはすべて起伏型（中高型）となり、対立する。

- ⑥ 前部要素が平板型のものに統合する形で、複合語のアクセントが中高型化し、複合動詞のアクセントは一型化する。

この推定は、山田美妙の法則に対する一つの説明原理として、今後のアクセント研究に影響を与えることになりそうである。

第3章は、東京周辺諸地域の方言（東京都檜原村方言、神奈川県小田原市方言、埼玉県東部地域）のアクセントの実態報告と分析である。ここでは、東京アクセントの古相を保つ檜原村方言、古相及び東京と同じ新しいタイプの両方の特徴を持つ小田原市方言、特殊なアクセントを持ちつつ共通語化が進んでいる埼玉県若年層というように、首都圏アクセントの多様な面が取り上げられている。今後、これらはどう推移するのか。「地域方言のアクセント特徴が共通語化の波の下、どんどん衰退していくと考えるのは早計であろう。むしろこうしたアクセントが首都圏方言に多様性をもたらし、その環境を複雑にすること、もともと伝統的地域方言にあったアクセントやアクセ

ント規則が周辺へと伝播していくことも考えられよう」(p274) というのが本書の展望である。その意味で本書は、これから始まるアクセント推移の出発点となる基礎的な研究書と言うことができ、首都圏方言のみならず、全国方言アクセントを研究する者にとって、必読の書となるに違いない。

最後に、二つだけ、紹介者の要望を述べておきたい。本書は、終章にも書かれているように、東京アクセントの古態性を探ることに主眼を置いている。そのため、古相を残す部分、とくに尾高型の例示と解説に多くの紙幅が使われている。尾高型の保持は、もちろん重要な特徴であるが、その尾高型もアクセント体系の中で、他のアクセント型との関係において分析する必要があると思う。例えば、p288の表5には、後部要素が動詞連用形の語が尾高型(○○○○○)になる例として、「口当たり」「共稼ぎ」「棒倒し」があがっているが、p151表7「5拍名詞」を見ると、後部要素が動詞連用形であっても尾高型でなく○●●●●型になる例として、「頭痛持ち」「二つ分け」「横流し」などが上がっている。どういう理由で一方は尾高型になり、一方は平板型になるのか。伝統的な東京アクセントを引き継いだから、というだけではなく、体系的な説明があれば

もっとよいと思う。

さらに、「命がけ」「人通り」「水浸し」は、p151表7では○●●●●型、p288の表5では○○○○○」となっている。

じつは、第1節と第2節で異なるアクセント型に表記されている語が本書には結構多い。話者の違いによるのか、揺れによるのか、何によるのか、説明が欲しいところである。

アクセント類の所属語彙についても、説明が欲しかった。例えば、「桜」は、第1〜2章では2類に入っているが、第3章では1類に入っている。「緑」は第1〜2章では2類だが、第3章では7類である。おそらく、第1〜2章では、平山輝男『全国アクセント辞典』に従い、第3章では金田一の類別語彙表に従ったためだと思われる。分析に大きな影響はないとしても、それに関する説明が一言、必要だと思った。以上は、今後、論を進展させる際に考慮いただければ幸いである。

(A5判、三三六頁、おうふう、二〇一四年二月発行、定価一〇〇〇円＋税)